

# Voice

40

## 傍観者から実践者へ ——スーダンの灌漑農業を支援

国際耕種株式会社 取締役

古賀直樹

スーダンの首都ハルツームから北東へ約250キロ離れた場所にある、リバーナイル州。その中部地域が、私たちが2015年から実施している「リバーナイル州灌漑スキーム管理強化プロジェクト」の対象地だ。

乾燥気候のスーダンで農業を成り立たせるためには水の確保が欠かせないが、国内の農地の大半では、雨に依存した不安定な天水農業が営まれている。食糧増産のために、国はナイル川などの河川水を効率的に利用した灌漑農業の近代化と、それに伴う生産性向上を優先課題に掲げている。

このプロジェクトでは、JICAの無償資金協力による灌漑ポンプ場の改修を受けて、ポンプ場を維持・

管理する組織や州農業省の運営能力強化に加え、農業技術の改善による農家や農村女性の生計向上を目指している。対象地域は柑橘類の生産地であることから、果樹生産における育苗管理、雑草防除、収穫後の処理・貯蔵などの課題解決を中心に据えつつ、タマネギや各種野菜の他、特に夏季の作物として換金性の高い油糧作物（ゴマ、落花生、ヒマワリ）も導入している。私はプロジェクトの専門家として、農業省職員や農家に対して、栽培から貯蔵、加工、販売に至るまでの指導を行っている。昨年11月には、落花生のデモンストレーション圃場で初めて収穫祭を開催し、農家と共に収穫の喜びを分かち合った。

私が国際協力の世界に入ったきっかけ



リバーナイル州のデモンストレーション圃場で行われた収穫祭。古賀専門家も現地の農家と共に、収穫された落花生の出来を調べた



ゴマの発育状況を調べる古賀専門家。今まで農閑期でも植え付けていなかった夏季に、落花生、ゴマ、ヒマワリなどの換金作物を栽培する試みを始めている

かけは、25年前に青年海外協力隊に参加し、生態調査の隊員としてシリアに派遣されたこと。第2の都市アレppoにある国際乾燥地農業研究センター（ICARDA）のプロジェクトの一環として派遣され、当時としては最先端技術であった地理情報システム（GIS）や位置情報（GPS）を駆使して、複数の資源マップを作成するのが大きな目標だった。北東部のアブドラズ山地の農牧民の村に住み込み、ヒッジ・ヤギの放牧やまきの採取など、部族間の土地利用形態による植生の変化につ

いてフィールドワークを実施した。大学・大学院では境界的な草地農学を専攻し、高山帯や半砂漠など世界各地の厳しい生態環境条件下における粗放な農業形態に興味があったため、シリアではまさに乾燥地農業に魅了された3年間だった。ただ、調査という性格上、聞き取りなどに協力してもらった住民に対する直接的な寄与は何もないまま終わった。協力隊でありながら、ましてや、どっぷり住民と生活を共にしながら、観察者という立場で終わった活

残った。その後、開発コンサルタントとして、シリア、パレスチナ、エジプト、モンゴルを渡り歩き、乾燥地農業を専門とする国際協力業務に従事することになった。現在、スーダンのプロジェクトでは、農家と農村女性に農業技術を普及するための人材育成を図っている。加えて、州内の他の地域にも効率的に技術を広めるため、農家と農村女性側に組合の形成を促し、グループを単位とした普及手法の構築を進めている。

スーダンは長年テロ支援国家と目されてきた関係から、欧米からの支援の多くは開発支援ではなく人道支援であり、モノ・サービスなどの一方的な配布に偏ることがほとんどである。しかし、リバーナイル州で灌漑農業を営む農家は、国内では比較的生活が安定している人もいるため、単純な配布は必要がないばかりか、時に彼らの意欲をそいでしまう危険性もある。そのため、プロジェクトでは、デモンストレーション圃場での展示やグループ活動において一部の費用負担や返金方式を採用し、農家の自立的な参画を促している。今後はさらに、搾油やマーケ

ティンクによるバリエーション構築に向けたモデル事業も開始する予定だ。

今の自分を支えているのは、協力隊のときに、調査・研究を重視するあまり国際協力の実践にまで至らなかった苦い経験だと感じている。プロジェクトでまず重要なのは、調査による現況・ニーズ把握であることに異論はない。しかし、現在心掛けているのは、現地の担当者や住民との丁寧な話し合いだ。実施に至るまでの準備過程を共有することで、ひと仕事の達成感を住民と一体的に味わうことがより大事だと思う。そして、やる事が決まったら色あせないうちに、迅速に実践に移すスピード感が大切だ。

観察といえば聞こえは良いが、観察者は時に参加しない「傍観者」となる。綿密な観察や鋭い提言より、一つの実践の方が尊い。グローバル人材としては絶えず「実践者」であり続けたいと思っている。



日本の支援により建設された灌漑ポンプ場。ナイル川から水をくみあげている



リバーナイル州アトバラ市の様子。用水路が整備され、灌漑農業が営まれている

スーダンは長年テロ支援国家と目されてきた関係から、欧米からの支援の多くは開発支援ではなく人道支援であり、モノ・サービスなどの一方的な配布に偏ることがほとんどである。しかし、リバーナイル州で灌漑農業を営む農家は、国内では比較的生活が安定している人もいるため、単純な配布は必要がないばかりか、時に彼らの意欲をそいでしまう危険性もある。そのため、プロジェクトでは、デモンストレーション圃場での展示やグループ活動において一部の費用負担や返金方式を採用し、農家の自立的な参画を促している。今後はさらに、搾油やマーケ

△Profile▽  
こが・なおき  
国際耕種株式会社取締役。1993年から3年間、青年海外協力隊（職種…生態調査）としてシリアで活動。その後、大分県直入町（現竹田市）の山村での自給自足生活をを経て現職。専門は、乾燥地農業・境界農学。

※「Voice」の内容は、筆者の個人的見解に基づいています。